

# 2025年度（令和7年度）第2回千葉県体育学会大会抄録

## <一般研究>

### 高齢者における総合型地域スポーツクラブ参加と健康関連指標との関連：スコーピングレビュー

○ 佐藤 正司（帝京平成大学）

新たな体育スポーツ活動の場として注目される総合型地域スポーツクラブは地域特性に応じた多様な取り組みにより、地域課題解決に向けた施策として質的充実を進めている。しかし、高齢者が参加することによる健康増進や介護予防効果に関する知見は不足している。本研究の目的は、スコーピングレビューにより高齢者における総合型地域スポーツクラブ参加と身体的・心理的・社会的健康との関連を概観し、既存研究のギャップを明確化することである。日本国内で報告された22編の論文を対象に分析した結果、身体的健康に関する報告はあるものの、心理的・社会的側面の検証は限定的であった。今後は大規模縦断データを用いた健康の多面的な検証と、効果の見える化が求められる。

### 千葉市民のスポーツ施設利用ニーズと公開講座に関する調査報告

#### －2023～2024年度 ちば産学官連携プラットフォームの共同研究調査からの示唆－

○ 庄司 一也（帝京平成大学） 植田 央（帝京平成大学）

本研究は、ちば産学官連携プラットフォームの共同研究の一環として、2023年度および2024年度に千葉市在住者を対象に実施したインターネット調査データを用い、スポーツ施設利用および公開講座に関するニーズを著者らで独自に分析したものである。分析の結果、スポーツや音楽分野における地域イベントの充実を求める意向が一定程度存在し、特に体育館やグラウンドの貸出に対する要望が顕著であることが明らかとなった。また公開講座の受講目的としては「趣味」が最も高頻度で選択され、希望分野では「医療・福祉・保健関係」が優位を示した。これらの知見から、大学には地域住民が主体的に学習および運動を享受できる環境の整備と、需要に即した講座・イベントの企画が求められることが示唆される。さらに、事前ニーズ把握の仕組みの導入、テーマのシリーズ化による講座構成、ならびに大学主催のスポーツイベントの展開が、地域住民のQOL向上に資する可能性が示された。

## 教員採用選考試験（保健体育）における一次選考で求められる能力の考察

### —A県を事例として—

#### ○ 黒川 康宏（大東文化大学）

本研究の目的は、教員採用試験（保健体育）一次選考の専門教養試験で求められている能力を明らかにすることである。本学の学生が受験する関東5都県の過去5年の試験問題を、解答方式、出題内容を形式、校種、分野、出展、資質能力などの項目で分析し、今回は、A県を考察した。

A県は、すべてマークシート方式で空欄補充であり、出展の内容に関する知識を再生・適用する力が求められている。中高共通問題であるが、出題割合に差はなく、中高の全般的基礎的理解力が求められている。出題は学習指導要領解説第2章からの出題が中心で、スポーツ種目は解説とスポーツに関する分野から網羅的に出題されている。さらに、時事や行政に関しても毎年出題され、県や国の最新情報の理解力が必要とされる。

以上より、A県の一次選考では、解説の内容の把握力、時事・行政の最新情報を読み取る力、スポーツルール等の理解力など多面的能力が、幅広い出典から求められてていることが明らかになった。また、一次選考は、基礎的・網羅的な知識の再生力を確認する段階であり、解答方式と出題内容の双方がその位置づけを裏付けていた。

## ピックルボールの競技・技術的特徴に関する考察

### —ラケットとボールを使用するネット型競技との比較を通して—

#### ○ 高橋 史匡（千葉県ピックルボール協会）、金田 晃一（千葉工業大学）

本研究は、ピックルボールをラケットとボールを用いたネット型競技の中で位置づけることを目的に、既存研究および関連資料をレビューし、テニス、バドミントン、卓球との比較から技術的・戦術的・競技的特徴の共通点と差異を分析した。その結果、ピックルボールはラケットとボールを用いたネット型競技と比較して、穴あきプラスチックボールとソリッドパドル、ノンボレーゾーンやツーバウンドルールといった用具とルールの制約により、ボールの減速と攻撃権の遅延を構造的に引き出し、ミス回避と至近距離での予測と駆け引きを最大化する戦術への転換がなされていると考えられた。これより、ピックルボールは既存競技の簡易版ではなく、用具とルールによって物理的なパワーとスピードの優位性を構造的に無効化し、近距離での予測と駆け引きによるラリー継続能力を勝敗の主因とする高度に戦術化されたネット型スポーツとして位置づけられることが提起された。

## Baseball15 の競技的構造および技術的特質に関する一考察

～教育現場におけるベースボール型球技の教材としての応用にむけて～

○加藤 敦也（千葉大学大学院）、西野 明（千葉大学）

（助成金報告）

本研究は、先行研究および前回大会での結果・考察を踏まえ、Baseball15（以降、B5）を体育におけるベースボール型球技の教材として捉え直し、その有効性について考察することを目的とした。その結果、B5 の打撃後の攻防は他のベースボール型球技と類似し、守備や走塁技術が通底していることを示した。また、B5 はバットやグローブが不要で、競技空間も狭い（18m 四方）ため、「道具がそろっていない」「実施するスペースがない」といった、教育現場の課題感に対する解決策にもなり得る。さらに、バットを使用しないことにより、傷害を未然に防止できる安全性に優れた教材である。B5 の競技空間や用具は、現在の児童の体力・身体能力に適した大きさであると推測され、すべての子どもが楽しみながら学習を進められる有用な教材であると示唆される。結論として、B5 は技能習得の可能性、実施の容易さ、安全性の高さからすべての子ども達が楽しめる競技であることを示し、教育現場での活用効果を明確にした。

## ＜実践研究＞

### ラグビーの防御におけるラック参加に関する実践研究

○廣瀬 恒平（尚美学園大学）、千葉 剛（防衛大学校）、澤田 大地（千葉経済大学付属高等学校）、高橋 仁大（鹿屋体育大学）

本研究では、これまで発表者が行ってきたブレイクダウンに関する研究成果を参考にして、球技における戦術立案に関する先行研究およびラグビーの理論書における防御戦術に関する文献研究を基に、対象チームである防衛大学校の特性も踏まえ、チームに適すると仮定される防御戦術を立案した。これをチームに導入して、導入前後のゲームパフォーマンスの比較および選手へのインタビュー調査から、戦術の内容の妥当性や有効性を検証した。分析の結果から、戦術は概ね遂行され、これによりプレー成功率が向上し、ゲームへのアクティブな影響が得られたものと推察された。一部、立案した内容とは異なる戦術が遂行された。選手へのインタビュー調査から、これまで一般化されていない知見が提供され、数量的データとの一致も見られた。今後は本研究のような実践的な戦術研究や質的研究手法を用いたデータの解釈のさらなる発展が期待される。

## **アスレティックトレーナーによる消防官に対する体力測定の実践報告**

○齊藤訓英（帝京平成大学）、高橋仁（帝京平成大学）

本学の日本スポーツ協会アスレティックトレーナー（以下、AT）資格を持つ教員と本学のAT資格取得規模の学生（のべ32名）により、市原市消防局全職員（301名）に対して体力測定を行なった（令和7年2月25～28日の4日間に渡って実施）。測定項目は文部科学省の新体力測定である。限られた時間での測定完了を可能にするために、事前に市原市消防局と十分なコミュニケーションをとり、測定前に実施可能な作業・調査の工夫を行った。あわせて、測定当日の時間短縮の取り組み（測定場所の配置やグループ分けなど）を行なったので、その詳細を報告する。地域の安全を支える消防官の健康維持・増進は社会的価値が高く、ATが消防官の健康管理に関わることは、地域住民への貢献につながる。地域住民の貢献につながる活動は、ATの職業的価値を高めることになる。従って、ATが消防官の健康維持・増進に関わることは社会的価値が高く、有意義な活動であると考える。

## **学生主体の運営による体力測定授業の実践報告**

○西山朋（帝京平成大学）、庄司一也（帝京平成大学）

帝京平成大学 健康医療スポーツ学部 医療スポーツ学科（以下、本学科）では、必修授業において各学年1～2回の体力測定を実施している。3年次の体力測定では学生主体の運営で測定を実施している。本発表では2025年度に実施した体力測定を成果と課題を報告した。

本学科の3年生116名に対し、18名の学生が測定係となった。測定は2日間にわたり、屋外と屋内の合計10種目を測定した。

学生主体の運営を行うことで、学生が主体性を發揮し、協調する姿勢がうかがえた。また、事前指導を行なったことで体力測定についての知識や測定技能を得ることができた。さらに、精度の高い測定のみならずスムーズかつ安全に配慮するという観点を学ぶことができた。

今回の報告では主観的な評価にとどまった。今後は客観的な評価を行い、成果の可視化することで教育の質の向上を図りたい。

ちはら台公園とちはら台 TENT を拠点とした、子どもたちの遊び場・居場所づくり  
○間瀬 博昭（一般社団法人公園未来プロジェクト）、田中 英貴（大和ハウス工業株式会社）、馬場 宏輝（帝京平成大学）

昔と比べて外遊びの時間が半減しているといわれているいま、スポーツの基本である遊びの機会、そのきっかけを作ることが急務である。その1つの方法として、地域住民が主体となって運営する“様々なスポーツを広く浅く遊びとして体験できる機会を提供する仕組み”に意義があると考えている。

市原市との公民連携事業として誕生した、大和ハウス工業(株)所有・運営のちはら台公園内にあるコミュニティ施設「ちはら台 TENT」は、主に市原市牧園エリアの小学生たちの居場所になっている。ちはら台 TENT を拠点として地域住民による各種ボランティア団体が活動しており、子どもたちのスポーツ体験イベントや釣りツアーなど、日常では味わえない体験を提供している。また、大学生ボランティアが中心となって、毎週、子どもたちとの遊びの場を作っている。

公園とコミュニティ施設という舞台で、子どもたちの居場所を見守りながら、この仕組みづくりに引き続き勤しみたい。

### <授業研究>

運動特性と共生の学びを取り入れた単元の実践的検討

～体育共生尺度の変容に着目して～

○根来彩夏(千葉大学大学院)、七澤朱音(千葉大学)

(助成金報告)

小学校学習指導要領体育編において、「仲間の状況に応じてルールや場を工夫する」ことで運動の様々な楽しみ方や関わり方があることや、「障害の有無に関わらずスポーツと共に楽しむ工夫をする経験」は共生社会の実現につながる学習機会になると示されている。本研究では、体育授業における単元展開を視野に入れ、ネット型の運動特性を学習しつつ、シッティングバレー・ボール等を教材に用いた「アダプテーション・ゲーム」の実施を通して、児童の「共生」に向けた態度がどのように育まれるのかを調査した。第1検証授業の単元前後に実施した「体育共生態度尺度調査」において、「違いの受容」、「過度な勝利思考」が、第2検証では、それらに加え、「障害の包摂」、「失敗への排斥」に、5%の有意差が認められた。第2検証で実際のパラアスリートとの交流を取り入れたことが、第2検証の態度形成に影響を与えた可能性が示唆された。また、ルールの調整により、ゲーム中のチーム内貢献度(触球回数)が公平になるチームも出現し、「共生」に向かう態度形成が図られた可能性も示唆された。しかし、条件設定の難易度によってチーム間で貢献度が異なった実態から、公平性を保証するための条件設定のあり方に課題が残った。

## 調整力を高める体つくりの運動遊びの授業構成

～コーディネーション能力を基盤とした準備運動・主運動・整理運動の一体的デザイン

～

○谷田川 翔（銚子市立飯沼小学校）・下永田 修二（千葉大学）

本研究は、コーディネーション能力を基盤として準備運動・主運動・整理運動を一体的に構成した「体つくりの運動遊び」の授業をデザインし、その効果を検証することを目的とした。対象は小学校第2学年18名で、全7時間の単元を実施した。準備運動では神経系の活性化を促すコーディネーション体操、主運動では調整力4要素（巧緻性・敏捷性・柔軟性・平衡性）に対応した運動、整理運動では柔軟性と心身の静穏化を促す活動を行った。調整力テスト、ビデオ映像による動作の質的分析、運動有能感測定尺度、形成的授業評価を行った結果、調整力テストでは4要素全てで向上が認められ、動作の質的改善も確認された。情意面では運動有能感が向上し、特に身体的有能さの認知に顕著な伸びが見られた。形成的授業評価においても主体的な学習行動が増加した。これらの結果から、本授業構成は、調整力を向上し、主体的な学びを促進することが示唆された。